物のいわれ

楠山正雄

目次

ひらめ

ほととぎす

鳩

物(もの)のいわれ（上）

そばの根(ね)はなぜ赤(あか)いか

あなたはおそばの木を知っていますか。あんなに真っ白な、雪のようなきれいな花が咲くくせに、一度畑に行って、よくその根をしらべてごらんなさい。それは血のように真っ赤です。いったいおそばの根は、いつからあんなに赤く染まったのでしょうか。それにはこんなお話があるのです。

むかし、三人の男の子を持ったおかあさんがありました。総領が太郎さん、二ばんめが次郎さん、いちばん末っ子のごく小さいのが、三郎さんです。

ある日、おかあさんは、町まで買い物に出かけました。出がけにおかあさんは、三人の子供を呼んで、

「おかあさんは町まで買い物に行って来ます。じき帰って来ますから、三人で仲よくお留守番をするのですよ。戸をしっかりしめて、みんなでおとなしくうちの中に入っておいでなさい。ひょっとすると悪い山姥が、おかあさんの姿に化けて、お前たちをだましに来ないものでもないから、よく気をつけて、けっして戸をあけてはいけません。山姥はいくら上手に化けても、声が、しゃがれたがあがあ声で、手足も、松の木のようにがさがさした、真っ黒な手足をしていますから、けっしてだまされてはいけませんよ。」
といい聞かせました。すると子供たちは、

「おかあさん、心配しないでもいいよ。おかあさんのいうとおりにして待っているからね。」

といったので、おかあさんは安心して出て行きました。

ところがじき帰って来るといったおかあさんは、なかなか帰って来ないで、そろそろ日が暮れかけてきました。子供たちはだんだん心配になってきました。

「おかあさんはどうしたんだろうね。」とみんなでいい合っていますと、だれかおもての戸をとんとんとたたいて、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。お前

たちのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」
といいました。
けれども子供たちは、しゃがれたがあがあ声をしているから、おかあさんではない。山姥が化けて来たにちがいないと思って、
「あけない、あけない、お前はおかあさんじゃあないよ。おかあさんはやさしい声だ。お前の声はがあがあしゃがれている。お前はきっと山姥にちがいない。」
といいました。
ほんとうにそれは山姥にちがいありませんでした。
山姥は途中で、おかあさんをつかまえて食べてしまっ

たのです。そしておかあさんに化けて、こんどは子供たちを食べに来たのです。けれども、子供たちが入れてくれないものですから、困って、村の油屋へ行って、油を一升盗んで、それをみんな飲んで、喉をやわらかにして、また戻って来て、とんとんと戸をたたきました。そして、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」

といいました。

こんどはそっくりおかあさんと同じような、やさしいいい声でした。けれども子供たちはまだほんとうに

しないで、

「じゃあ、先(さき)に手を出(だ)してお見(み)せ。」

といいました。

山姥(やまうば)が戸(と)のすきまから手を出(だ)しましたから、子供(こども)たちがさわってみますと、それは松(まつ)の木のように節(ふし)くれだって、がさがさしていました。子供(こども)たちはまた、

「いいえ。あけない、あけない。おかあさんはもっとつるつるして柔(やわ)らかな手をしている。お前(まえ)は山姥(やまうば)にちがいない。」

といいました。

そこで山姥(やまうば)は裏(うら)の畑(はたけ)へ行って、芋(いも)がらを取(と)って、手

の先にぐるぐる巻きつけました。

そして山姥は三度めにうちの前に立って、とんとんと戸をたたいて、

「子供たちや、あけておくれ。おかあさんだよ。みんなのすきなおみやげを、たんと買って来たからね。」

といいますと、子供たちは中から、

「じゃあ、手をお見せ。ほんとうにおかあさんだか、どうだか、見てやるから。」

といいました。

山姥はまた戸のすきまから手を出しました。こんどは手がつるつるして柔らかだったので、それではおか

あさんにちがいないと思って、子供たちは戸をあけて、山姥を中へ入れました。

二

おかあさんに化けた山姥は、うちの中に入ると、さっそくお夕飯にして、子供たちがびっくりするほどたくさん食べて、今夜はくたびれたから早く寝ようといって、いつものとおり末っ子の三郎を連れて、奥の間に入って寝ました。太郎と次郎は二人で、おもての間に寝ました。

夜中にふと、太郎と次郎が目を覚ましますと、奥の間でだれかが、何だかぼりぼり物を食べているような音がしました。それは山姥が、末っ子の三郎をつかまえて食べているのでした。

「おかあさん、おかあさん、それは何の音ですか。」

と、太郎が聞きました。

「おなかがすいたから、たくあんを食べているのだよ。」

と、山姥がいいました。

「わたいも食べたいなあ。」

と、次郎がいいました。

「さあ、上げよう。」

と、山姥はいって、三郎の小指をかみ切って、子供たちの居る方へ投げ出しました。太郎がそれを拾ってみると、暗くってよく分かりませんけれど、何だか人間の指のようでした。太郎はびっくりして、そっと布団の中で、次郎の耳にささやきました。

「奥に居るのは山姥にちがいない。山姥がおかあさんに化けて、三郎ちゃんを食べているのだよ。ぐずぐずしていると、こんどはわたいたちが食べられる。早く逃げよう、逃げよう。」

太郎と次郎はそっと相談をしていますと、奥ではも

りもり山姥が三郎を食べる音が、だんだん高く聞こえました。

その時次郎は布団から頭を出して、

「おかあさん、おかあさん、お小用に行きたくなりました。」

といいました。

「じゃあ、起きて外へ出て、しておいでなさい。」

「戸があきません。」

「にいさんにあけておもらいなさい。」

そこで太郎と次郎は逃げ支度をして、のこのこ布団からはい出して、戸をあけて外へ出ました。空はよく

晴れて、星がきらきら光っていました。二人はお庭の井戸のそばの桃の木に、なたで切り形をつけて、足がかりにして木の上まで登りました。そしてそっと息を殺してかくれていました。

　いつまでたっても、きょうだいがお小用から帰って来ないので、山姥はのそのそさがしに出て来ました。明け方の月がちょうど昇りかけて、庭の上はかんかん明るく見えました。けれどもきょうだいの姿はどこにも見えませんでした。さんざんさがしてさがしてくたびれて、のどが渇いたので、水を飲もうと思って、山姥が井戸のそばに寄ると、桃の木の上にかくれてい

るきょうだいの姿が、水の上にはっきりとうつりました。

「小用に行くなんて人をだまして、そんなところに上がっているのだな。」

と、山姥は木の上を見上げて、きょうだいをしかりました。その声を聞くと、きょうだいはひとちぢみにちぢみ上がってしまいました。

「どうして登った。」

と、山姥が聞きますから、

「びんつけを木になすって登ったよ。」

と、太郎がいいました。

「ふん、そうか。」

といって、山姥(やまうば)はびんつけ油(あぶら)を取(と)りに行きました。

きょうだいが上でびくびくしていると、山姥(やまうば)はびんつけを取(と)って来(き)て、桃(もも)の木にこてこてなすりはじめました。

「それ、登(のぼ)るぞ。」

といいながら、山姥(やまうば)は桃(もも)の木に足(あし)をかけますと、つるり、びんつけにすべりました。それからつるつるつる、つるつる、何度(なんど)も何度(なんど)もすべりながら、それでも強情(ごうじょう)に一間(けん)ばかり登(のぼ)りましたが、とうとう一息(ひといき)につるりとすべって、ずしんと地(じ)びたにころげ落(お)ちました。

すると次郎（じろう）が上から、

「ばかな山姥（やまうば）だなあ、びんつけをつけて木に登（のぼ）れるものか。なたで切（き）り形（がた）をつけて登（のぼ）るんだ。」

といって笑（わら）いました。

「そのなたはどうした。」

と、山姥（やまうば）が聞（き）きますから、

「なたは井戸（いど）のそこに入（はい）っているよ。」

と、次郎（じろう）はいってまた笑（わら）いました。山姥（やまうば）は井戸（いど）のそこをのぞいてみましたが、とても手がとどかないので、くやしがって、物置（ものおき）から鎌（かま）をさがして来（き）て、桃（もも）の木のびんつけを削（けず）り落（お）として、新（あたら）しく切（き）り形（がた）をつけはじ

めました。山姥が桃の木に切り形をつけはじめたのを見て、きょうだいは心配になってきました。そのうちどんどん山姥は切り形をつけてしまって、やがてがさがさ、やかましい音をさせながら登って来ました。子供たちは困って、だんだん高い枝へ、高い枝へと、登って行きました。とうとういちばん上のてっぺんまで登って行って、もうこれより先へ行きようがない所まで登りましたが、やはり山姥はどんどん上まで登って来ます。困りきってしまって、二人は大空を見上げながら、ありったけの悲しい声をふりしぼって、

「お天道さま、金ン綱。」

とさけびました。

すると、がらがらという音がして、高い大空の上から、長い長い鉄の綱がぶら下がってきました。太郎と次郎はその綱にぶら下がって、するする、するする、大空まで登って逃げました。

山姥はそれを見ると、くやしがって、同じように空を見上げて、

「お天道さま、腐れ縄。」

と大声を上げてわめきました。

するとすぐ、ぼそぼそという音がして、高い大空の上から、長い長い腐れ縄がぶら下がってきました。

山姥(やまうば)はいきなりその縄(なわ)にぶら下(さ)がって、子供(こども)たちを追(お)っかけながら、どこまでもどこまでも登(のぼ)って行きました。するうち自分(じぶん)のからだの重(おも)みで、だんだん縄(なわ)が弱(よわ)ってきて、中途(ちゅうと)からぷつりと切(き)れました。

　山姥(やまうば)は半分縄(はんぶんなわ)をつかんだまま、高(たか)い大空(おおぞら)からまっさかさまに、ちょうど大きなそば畑(ばたけ)の真(ま)ん中(なか)に落(お)ちました。そしてそこにあった大きな石にひどく頭(あたま)をぶっつけて、たくさん血(ち)を出(だ)して、死(し)んでしまいました。その血(ち)がそばの根(ね)を染(そ)めたので、いまだにそれは血(ち)のように真(ま)っ赤(か)な色(いろ)をしているのです。

猿と蟹

ちょうど田植え休みの時分で、村では方々で、にぎやかな餅つきの音がしていました。山のお猿と川の蟹が、途中で出会って相談をしました。

「どうだ、あの餅を一臼どろぼうして、二人で分けて食べようじゃないか。」

さっそく相談がまとまって、猿と蟹は餅を盗み出すはかりごとを考えました。

一軒のうちへ行ってみると、うち中の人が残らずお庭へ出て、ぺんたらこ、ぺんたらこ、夢中になって

餅をついていました。お座敷には赤んぼが一人寝かされたまま、だれもそばには居ませんでした。

　蟹はその時、のそのそと縁がわからはい上がって行って、赤んぼの手をちょきんと一つはさみました。すると赤んぼはびっくりして、痛がって、「わっ。」と火のつくように泣き出しました。お庭に出ていた人たちは、どうしたのかと思って、びっくりして、臼も杵も残らずほうり出して、お座敷へかけつけますと、もうその時分には、蟹はのそのそ逃げ出して行ってしまいました。みんなは赤んぼがどうして泣いたのか、さっぱり分からないので、ぶつぶついいながら、また

お庭へ戻って行きますと、つきかけの餅が一臼そっくり、臼のままなくなっていました。みんなは二度ばかにされたので、くやしがって、外へ追っかけて出てみましたが、こんども何も見えませんでした。

　蟹は坂の上まで行って、猿の来るのを待っていますと、猿は大きな臼をころがしながらやって来ました。

「どうだ。うまくいったじゃないか。さあ、食べよう。」

　と、蟹がいいますと、

「うん、なかなか重いので骨が折れたよ。だがこれですぐ食べては、楽しみがなくなっておもしろくないな

あ。どうだ、この臼をここからころがすから、二人であとから追っかけて行って、先に着いた者が餅を食べることにしよう。」

と、猿がいいました。

すると蟹は口からあぶくを吹きながら、

「猿さん、それはだめだよ。駆けっくらをしたって、わたしがお前にかなわないことは分かりきっているではないか。そんないじの悪いことをいわずに、仲よく半分ずつ食べよう。」

と、こういいましたが、猿は聴かないで、

「いやならよせ。おれが一人で食べてしまう。重い思

いをして、臼をかついで来たのはおれだからなあ。」

といいました。

「だって、わたしだって赤んぼを泣かして、みんなをだまして、お前にしごとをさせてやったのじゃないか。」

と、蟹がいいました。でも猿は、

「ぐちをいうな。それよりか駆けっくらで来い。」

といって、かまわず臼を坂の上からころがしました。臼はころころころころがって行きました。猿もいっしょに追っかけて行きます。しかたがないので、蟹もむずむずあとからはって行きますと、ちょうど坂の中ほどま

で行かないうちに、餅は臼の中からはみ出して、道ばたの木の根にひっかかりました。そして、臼ばかりころころ下までころげて行きました。そんなことは知らないものですから、猿もいっしょに臼を追っかけて、どこまでもころがって行きました。

蟹は途中、木の根に白いものが見えるので、ふしぎに思ってそばへ寄ってみますと、つきたての餅でしたから、「これはうまい。」と思って、一人でおいしそうに食べはじめました。猿はせっかく下まで駆けて行ってみると、空臼だったものですから、がっかりして、

「こらこら、早く餅をころがさないか。」

と下からどなりました。すると蟹（かに）はあざ笑（わら）って、

「つきたての餅（もち）が坂（さか）をころがるものか。今（いま）に堅（かた）くなってお鏡餅（かがみもち）になったら、ころがしてやろう。」

といいました。猿（さる）は腹（はら）を立てましたが、自分（じぶん）からいいだして、したことですから、しかたなしに蟹（かに）にあやまって、おしりの毛（け）を抜（ぬ）いて蟹（かに）にやって、半分餅（はんぶんもち）を分（わ）けてもらいました。それでいまだにお猿（さる）のおしりには毛（け）がなくなって、蟹（かに）の手足（てあし）には毛（け）が生（は）えているのだそうです。

狐（きつね）と獅子（しし）

むかし、日本の狐がシナに渡って、あちらのけだものたちの仲間に入ってくらしていました。

ある時、けだものたちが、大ぜい森の中に集まって、めいめいかってなじまん話をはじめました。するとみんなの話を聞いていた獅子が、さもさもうるさいというような顔をして、

「だれがなんといったって、世界中でおれの威勢にかなう者はあるまい。おれが一声うなれば、十里四方の家に地震が起こって、鍋釜に残らずひびがいってしまう。」

といいました。

すると、虎が負けない気になって、

「なんの、おれが一走り走れば、千里のやぶも一飛びだ。くやしがっても、おれの足にかなうものはあるまい。」

といいました。

その時、日本の狐も、負けない気になって、

「どうして、からだこそ小さくっても、君たちに負けるものか。」

といばっていいました。

すると、獅子がおこって、

「生意気をいうな。ちっぽけな国に生まれた小狐のくせに。よし、そこにじっとしていろ。一つおれがうなってみせてやるから。きさまのちっぽけな体なんか、ひとちぢみにちぢんで、ごみのように吹ッ飛んでしまうぞ。」

こういいながら、獅子はおなかに力を入れて、一声「うう。」とうなりはじめました。さすがにいばっただけのことはあって、それはほんとうに、そこらに居る者の体ごと、吹き飛ばしそうな勢いでしたから、狐はあわてて、地びたに小さな穴をほって、その中に小さくなって、もぐり込みました。そして、うなり声が

やむと、ひょいと中から飛び出して来て、

「なんだ、獅子さん、大そういばったが、それだけのことか。ごみのように吹き飛ばされるどころか、このとおり貧乏ゆるぎもしないよ。」

とさんざんにあざけりました。すると獅子は、こんどこそ、ほんとうに体中の毛を逆立てておこって、力いっぱい意気張って、一声「うう。」とうなりますと、あんまり力んだひょうしに、首がすぽんと抜けてしまいました。狐は、そこでいよいよとくいになって、こんどは虎に向かい、

「どうしたね。わたしにさかからえば、獅子だってこの

とおりだ。君（きみ）もいいかげんにおそれいるがいいよ。」

といいますと、虎（とら）はなかなか承知（しょうち）しないで、

「よし、そんなら千里（り）のやぶを、かけっこしよう。」

といいだしました。狐（きつね）は困（こま）った顔（かお）もしないで、

「うん、いいとも。」

といって、さっそく競争（きょうそう）の支度（したく）にかかりました。

やがて一、二、三のかけ声（ごえ）で、虎（とら）と狐（きつね）は駆（か）け出（だ）したと思（おも）うと、狐（きつね）はひょいとうしろから虎（とら）の背中（せなか）に、のっかってしまいました。虎（とら）はそんなことは知（し）りませんから、むやみに駆（か）けるわ、駆（か）けるわ、千里（り）のやぶもほんとうに一ッ飛（と）びで飛（と）んで行ってしまいますと、さすが

に体中大汗になっていました。するとそれよりも先に狐は、ひょいと虎の背中から、飛び降りて、二三間前の方で、

「おいで、おいで。」

をしていました。それで虎も勝負に負けました。

狐は大いばりで獅子の首を背負って、日本に帰って来ました。これが、今でも、お祭りの時にかぶる獅子頭だということです。

蛙とみみず

むかし、むかし、大昔、神さまが大ぜいの鳥や、虫やけだものを集めて、てんでんが毎日食べて、命をつないでいくものをきめておやりになりました。何万という生き物が、ぞろぞろ神さまの所へ集まって来て、めいめい、おいい渡しを受けました。その中で、蛇は、いちばんおなかをすかしきっていて、ひょろひょろしていましたから、だれよりもおくれて、みんなのあとからのたりのたりはって行きました。すると、そのあとから、蛙がぴょんぴょん元気よくとんで来ました。蛙はずんずん蛇を追いこして、

「蛇さん、ずいぶんのろまだなあ。おいらのしりでも

しゃぶるがいい。」

と悪口をいいながら、またずんずん行ってしまいました。蛇はくやしくってたまりませんけれども、どうにもならないので、だれよりもいちばんあとにおくれて、のろのろついて行きました。蛇が神さまの前に出た時は、大抵の生き物が、それぞれ食べ物を頂いて、にこにこしながら、帰って行くところでした。神さまは、蛇がおくれて来たのをごらんになって、

「どうしてそんなに遅くなったか。」

とお聞きになりました。そこで蛇は、おなかがへって、どうにも早く歩けなかったこと、途中で蛙があと

から追いついて来て、おしりでもしゃぶれといったことを残らず訴えました。すると神さまは、大そうおおこりになって、いったん帰りかけた蛙をお呼びもどしになりました。そして、蛇に向かって、

「蛙がおしりをしゃぶれといったのならかまわない。これから、おなかのへった時には、いつでも蛙のおしりからまるのみにのんでやるがいい。」

とおっしゃいました。そこで蛇は大そうよろこんで、いきなり蛙をつかまえて、おしりからひとのみにのんでしまいました。これで蛇の食べ物がきまったので、神さまがお帰りになろうとしますと、小さな声で、

「もし、もし。」

と呼(よ)びながら、地(じ)の中から出て来(き)たものがありました。それは、目の見(み)えないみみずで、目が不自由(ふじゆう)なものですから、こんなに来(く)るのに手間(てま)をとってしまったのです。

「もし、もし、神(かみ)さま、わたくしは、何(なに)を食(た)べたらよろしゅうございましょうか。」

とみみずがいいました。神(かみ)さまのお手には、なんにももう残(のこ)ってはいませんでした。そこで、めんどうくさくなって、

「土(つち)でも食(た)べていろ。」

とおっしゃいました。すると、みみずは不足そうな顔をして、

「土を食べてしまったら、何を食べましょうか。」

としつっこくたずねました。すると神さまはかんしゃくをおおこしになって、

「夏の炎天にやけて死んでしまえ。」

とおしかりつけになりました。そこで、みみずは土を食って生き、夏の炎天に出ると、やけ死んでしまうのだそうです。

すずめときつつき

むかし、すずめがせっせと鏡に向かって、おはぐろをつけていますと、おかあさんが死んだという知らせが来ました。びっくりして、おはぐろを半分つけかけたまま、すずめはおかあさんの所へ駆けつけて行きました。神さまはすずめの孝行なことをおほめになって、

「すずめよ、毎年これから稲の初穂をつむことを許してやるぞ。」

とおっしゃいました。でもおはぐろは、つけかけたまま途中でやめたので、すずめのくちばしは、いまだ

に下だけ黒くって、上の半分はいつまでも白いままでいるのです。

それとはちがって、きつつきは、おかあさんの死んだ知らせが来ても、鏡に向かって紅をつけたり、おしろいをぬったり、おしゃれに夢中になっていて、とうとう親の死に目に合わなかったものですから、神さまがおおこりになって、

「お前は木の中の虫でも食べているがいい。」

とお申し渡しになりました。それできつつきはいつも木の枝から枝を渡り歩いて、ひもじそうに虫をさがしているのです。

物(もの)のいわれ（下）

ふくろうと烏(からす)

むかし、ふくろうという鳥(とり)は、染物屋(そめものや)でした。いろいろの鳥(とり)がふくろうの所(ところ)へ来(き)ては、赤(あか)だの、青(あお)だの、ねずみ色(いろ)だの、るり色(いろ)だの、黄色(きいろ)だの、いろいろなきれいな色(いろ)に体(からだ)を染(そ)めてもらいました。烏(からす)がそれを見(み)て、うらやましがって、もともと大(たい)そうなおしゃれで

したから、いちばん美しい色に染めてもらおうと思って、ふくろうの所にやって来ました。

「ふくろうさん、ふくろうさん。わたしの体を、何かほかの鳥とまるでちがった色に染めて下さい。世界中の鳥をびっくりさせてやるのだから。」

と、烏がいいました。

「うん、よしよし。」

とふくろうは請け合って、さんざん首をひねって考えていましたが、やがて烏をどっぷり、真っ黒な墨のつぼにつっ込みました。

「さあ、これでほかに類のない色の鳥になった。」

とふくろうはいいながら、烏を引き上げてやりました。烏はどんな美しい色に染まったろうと、楽しみにしながら、急いで鏡の前へ行って見ますと、まあ、驚きました、頭からしっぽの先まで真っ黒々と、目も鼻も分からないようになっているではありませんか。そこで烏は、よけい真っ黒になっておこりながら、

「何だってこんな色に染めたのだ。」

といいますと、ふくろうは、

「だって外に類のない色といえば、これだよ。」

といって、すましていました。烏はくやしがって、

「よしよし、ひとをこんな目に合わせて。今にきっと

かたきをとってやるから。」
とうらめしそうにいいました。
その時(とき)から烏(からす)とふくろうとは、かたき同士(どうし)になりました。そしてふくろうは烏(からす)のしかえしをこわがって、昼間(ひるま)はけっして姿(すがた)を見(み)せません。

蜜蜂(みつばち)

むかし、むかし、大昔(おおむかし)、神(かみ)さまがいろいろの生(い)き物(もの)をお作(つく)りになった時(とき)に、たくさんの蜂(はち)をお作(つく)りになりました。そのたくさんの蜂(はち)の中に、蜜蜂(みつばち)だけが針(はり)を

持っていませんでした。蜜蜂は不足そうな顔をして、神さまの所へ行って、

「ほかの蜂はみんな針を持っておりますが、わたくしだけは針がありません。どうか針をつけて下さい。」

といいました。

「いいや、お前は人間に飼われるのだから、針はいらない。ぜひほしいというなら、針をやってもいいが、人間を刺すことはならないぞ。もし間違えて刺したら、針が折れて、命がなくなるぞ。」

と、神さまがおっしゃいました。

「けっして刺しませんから、どうぞ針を下さい。」

と、蜜蜂がいいました。
「それなら針をやろう。」
と、神さまがおっしゃって、蜜蜂に針を下さいました。そこで約束のとおり、蜜蜂には針はあっても、人間を刺しません。刺せば針が折れて、命がなくなるのです。

ひらめ

むかし、いじの悪い娘がありました。ほんとうのおかあさんは亡くなって、今のは後から来たおかあさ

んでした。それで何（なに）かいけないことをして、おかあさんにしかられると、おかあさんが自分（じぶん）をにくらしがってしかるのだと思（おも）って、いつもうらめしそうに、おかあさんをにらみつけていました。

ところがあんまりおかあさんをにらみつけていたものですから、いつの間（ま）にか目がだんだんうしろに引（ひ）っ込（こ）んで、とうとう背中（せなか）の方（ほう）に回（まわ）ってしまいました。そして娘（むすめ）はひらめというお魚（さかな）になってしまいました。

そういえばなるほど、ひらめというお魚（さかな）は、目が背中（せなか）についています。ですから今（いま）でも、親（おや）をにらめると、平目（ひらめ）になるといっているのです。

ほととぎす

むかし、二人のきょうだいがありました。弟の方は大そう気立てがやさしくて、にいさん思いでしたから、山へ行ってお芋を取って来ると、きっといちばんおいしそうなところを、にいさんに食べさせて、自分はいつもしっぽのまずいところを食べていました。けれどもにいさんは目が見えない上に、ひがみ根性が強かったものですから、「弟がきっと自分にかくしていいところばかり食べて、自分には食いあましをく

れるのだろう。ひとつおなかを裂いて見てやりたい。」と思って、とうとう弟を殺してしまいました。

けれども弟のおなかの中には、お芋のしっぽばかりしかはいっていませんでした。正直な弟を疑っていたことがわかると、にいさんは大そう後悔して、死んだ弟の体をしっかり抱きしめて、血の涙を流しながら泣いていました。

すると、死んだ弟の体から羽が生えて、鳥になって、

「がんくう。がんくう。」

と鳴いて、飛んで行きました。

「がんこ」というのはお芋のしっぽということです。弟は「お芋のしっぽをたべている。」ということを、「がんくぅ。がんくぅ。」といって、鳴いたのでした。すると兄はいよいよ弟がかわいそうになって、これも鳥になって、

「ほっちょかけたか、おっととこいし。」

と、鳴き鳴き弟のあとを追って飛んで行きました。毎年うの花の咲くころになると、暗い空の中で、しぼるような悲しい声で鳴いて飛びまわっているほととぎすは、人によって「がんくぅ。がんくぅ。」と鳴いているようにも聞こえますし、「ほっちょかけたか、おっ

とこいし。」と鳴いているようにも聞こえます。これは鳥になったきょうだいが、やみ夜の中で、いつまでも呼び合っているのだということです。

鳩

鳩もむかしは親不孝で、親のいうことには、右といえば左、左といえば右と、何によらずさからうくせがありました。ですから、親鳩は子鳩に山へ行ってもらいたいと思う時には、わざと今日は畑へ出てくれといいました。畑へ下りてもらいたいと思う時には、

わざと、今日は山へ行ってくれといいました。

いよいよ親鳩が死ぬとき、死んだら山のお墓に埋めてもらいたいと思って、その時もわざと、

「わたしが死んだら、川の岸の小石と砂の中に埋めておくれ。」

といい残しました。

親鳩に別れると、子鳩は急に悲しくなりました。

そしてこんどこそは親のいいつけにそむくまいと思って、そのとおり河原の小石と砂の中に、親のなきがらを埋めて、小さなお墓を立てました。

ところが川のそばですから、雨がふって、水がふえ

て、河原に水が流れ出すたんびに、小石と砂がくずれ出して、お墓もいっしょに流れていきそうになりました。子鳩はよけい親鳩をこいしがって、ぽっほ、ぽっほといつまでも悲しそうになきました。

せっかく孝行な子供になろうと思っても、親のいなくなったのを、鳩は今でもくやしがっているのだそうです。

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社
1983（昭和58）年4月10日第1刷発行
※底本の「物のいわれ（上）」「物のいわれ（下）」をひとつにまとめました。
入力：鈴木厚司
校正：大久保ゆう
2003年9月29日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんで

す。